

③15秒未満～1分程度の回答で約7割を占めたが、浸漬させない先生も3割程度いた。

④90～100℃が多かったが、水道水を加え温度を下げて使用する先生も2割程度いた。

⑤硬化前に水洗と完全硬化後に除去の意見が半々であった。

⑥臨床研修が最多で、次いで学部教育であった。添付文書を参考にした先生がほぼいなかった。

症例に応じて手技は異なると思うが、やはり術者により操作は一律でないことが分かった。また、添付文書を参考に行っている先生が少数であった。添付文書は使用方法や注意点などが記載されていることから、使用前の熟読は必須であることの周知が必要と考えられた。

今回の結果を踏まえ、常温重合レジンに関する研究をさらに進めていく。

【謝辞】ご多忙の中、本アンケートにご参加・ご協力くださった先生方に深く御礼申し上げます。

8) Cherubism患児に対する口腔管理の1例

○田中 康裕¹, 加川千鶴世¹, 島村 和宏², 高橋文太郎²
川原 一郎², 金 秀樹², 鈴木 佑太²
(奥羽大・歯・成長発育歯¹, 奥羽大・歯・口腔外科,
鈴木歯科医院²)

【緒言】Cherubismは自己炎症性骨疾患に含まれる稀な疾患で、顎骨の無痛性両側性膨隆や眼球の上方偏位などの顔面の変形により、天使を想起させる特徴的な顔貌から名付けられた。

今回我々は、本学歯学部附属病院においてCherubismと診断された症例を経験したので、口腔外科学的診察と小児歯科学的な指導管理について報告する。

なお、今回の発表に際し、保護者の同意を得ている。

【症例】

初診時年齢：6歳8か月 女児

主訴：上顎両側第二乳臼歯の早期脱落および永久歯歯胚位置異常

初診時の顔貌所見：1. 左側眼窩部に紅斑 2. 眼球の上方偏位 3. 両側頬部の対称性腫大 4. 鼻根部の平低化

初診時の口腔内所見：1. E D D:早期脱落 2.

上下顎歯槽堤の頬舌側方向の膨隆 3. 口蓋の平坦化 4. 歯列弓幅径の増大と歯列弓長径の短縮化 5. E:歯頸部C1, フッ化ジアミン銀塗布
初診時のパノラマエックス線写真所見：1. 上下顎骨に多房性の境界明瞭な透過像 2. 乳歯歯根の異常吸収 3. 永久歯歯胚の骨内位置異常 4. 2 2:矮小化と形態異常

【経過】初診時パノラマエックス線写真より多房性の顎骨嚢胞が確認されたため、本学口腔外科に精査を依頼した。基底細胞母斑症候群との鑑別のためエックス線写真撮影と全身麻酔下にて生検を行った。その結果、Cherubismと診断し、3か月ごとの経過観察を行うこととした。

小児歯科においては、う蝕の予防と動揺歯の固定を含む経過観察が必要と判断した。以後、口腔衛生ならびに永久歯の萌出に伴う歯列咬合の育成を目的に管理を開始した。

【考察およびまとめ】Cherubismは顎骨に透過像が現れ、骨膨隆が生じ顔貌に大きな変化をもたらす疾患である。

顎骨の膨隆は思春期まで続き、それ以降、骨膨隆は停止するといわれている。顎骨の膨隆が停止するまでの間、口腔内では歯の動揺や脱落といった症状が出現し、それらの症状を緩和するために経過観察と対症療法が必要となる。患児はこれから思春期を迎えるため、自分の顔貌の変化に伴って保護者とともに戸惑いや不安を感じると思われる。

今後も患児と家族の意向をくみとりながらサポートを続けていきたいと考えている。

9) Lesch-Nyhan症候群と診断された患児の症状と経過

○舟山 敦雄, 田中 康裕, 関野 貴大, 神庭 優衣
永山 道代, 加川千鶴世, 島村 和宏
(奥羽大・歯・小児歯科)

【緒言】Lesch-Nyhan症候群は核酸代謝酵素の遺伝子変性による伴性潜性(劣性)遺伝である。全身所見として不随意運動、精神発達遅滞、高尿酸血症があり、歯科的所見では口腔粘膜の咬傷が特徴である。今回、Lesch-Nyhan症候群患児に対し歯科的管理を行う機会を得たのでその概要を